金城公主の入蔵について（下）

佐藤長

九

とにかく開元十年以後は慧超伝に述べるごとく（本論文〔中〕六八・六九頁）小勃律地方は唐の管轄下におかれて、吐蕃の西トルキスタン方面への進出は遮断されたが、これはとりもなおさず唐の実力がパミール山中の小国に実際に及んでいたことを示すものである。しかしこの唐の小勃律支配は実は吐蕃に頗る悪印象を与えたらしい。吐蕃の唐に対する態度は書信を呈するごとに対等の礼を求め、「言詞は悖慢で無礼なもの」であつた（新伝）。開元十三年の十一月に玄宗は泰山に登り、封禅の儀を盛大に執行したが、これより帰つたとき中書令の張説は上奏して言つた（旧伝）。

「吐蕃の憎むべき反逆はまことに無限の誅殺に価するものであります。〔しかし〕それに又征討を行うなどのことは実は疲弊を招くだけであります。かつ十数年の間、甘、涼、河、鄯の諸州は微発が続いて息つく暇もなく、たとい度々勝つたところで〔損害を〕償うことはできません。聞くところによりますと吐蕃は過ちを悔いて和平を願つております。どうぞ陛下は使をやつてその低頭して内属するのを許し、そうして辺境を静隠にして下されば、人民はひとえに非常な幸福でありましよう。」

これに対し玄宗は、

「自分と王君㚟が計画を立てるのを待つてもらいたい。」

と言つたが、張説は退出して源乾曜に言つた。

「〔王〕君㚟は勇敢ではあるが無謀であり、常にまぐれあたりの幸運を考えている。両国の和好はどうして成功しよう。もし〔彼が〕朝廷に入つて謀を述べるならば、自分の計画は行われなくなるであろう。」

ついで王君㚟が入朝して報告を行つたが、遂に兵を率いて吐蕃を討伐することを天子に願つた（旧伝）。当時王君㚟は隴右節度使の重任にあり、玄宗の寵愛する軍人であつたので、彼の願はそのまま許可されることになつた。唐はここに好戦的な武将を配置して積極的

に戦闘の開始を待機する姿勢を整えたのである。

勃律問題以来唐蕃の関係は冷やかなものとなつていた。而して開元十四年冬[1]、吐蕃の大将悉諾邏が大斗谷に入寇し、又方向をかえて甘州(甘粛省張掖県)に進撃し、町や村落を焚掠することから戦闘は開始された。悉諾邏 siet nâk lâ は明かにタグラ Stag sgra であるが、こののち瓜州を攻撃した悉諾邏恭禄 Stag sgra khoṅ lod と同一人であるかどうかは断定できない。大斗谷は元和郡県図志巻四〇涼州の条に、

大斗軍、涼州西二百里、本是赤水軍守捉、開元十六年改為大斗軍、因大斗枝谷為名也。

とある大斗枝谷と同一であろう。ただ新唐書地理志涼州の条を見ると、

西二百里、有大斗軍。

とあり、殆どこれと同文が載せられているが、それには大斗枝谷を大斗抜谷としている。顧氏は読史方輿紀要の中でその地を陝西涼州衛(甘粛省武威県)の西二百里に比定している。武徳三年に突厥の闕可汗 Kül qayan (?) が李軌と戦つて敗北し「達斗抜谷に走り吐谷渾と相輔車したが、遂に滅された」(新唐書巻二一五突厥伝西突厥の条)と言う達斗抜谷も同一の地であろう。タグラの軍は精鋭をすぐつたものであつたので王君㚟は恐れて戦わなかつたが、大雪が降り敵の凍死するものが非常に多くなり、已むを得ず積石軍の西路を通つて彼等は帰国の道を急いだ。タグラの軍は青海の西の大非川(=ブゲ河)[2]にたどりついたが、君㚟は人をやつて先にその帰路の草を焼きはらわせていたので、放牧した馬は過半数が斃死した。而して君㚟は秦州都督の張景順らと軍を率いてその背後を襲い、氷結した青海をわたり、落伍していた兵を捕虜にし、輜重を鹵獲して帰還した。

この戦は開元十五年(七二七)の正月に行われたのであるがその報復のためであろう、年内の九月には吐蕃は瓜州城を攻陥した。このときの吐蕃の大将は悉諾邏恭禄と燭龍莽布支であるが、これらがそれぞれタグラコンロェ Stag sgra khoṅ lod とツォグロマンポジェ Tsog ro (?) maṅ po rje であることは前に述べたことがある。[3] 彼等は瓜州城を攻め刺史の田元獻と王君㚟の父の寿を捕え、城中の軍需、糧食などを皆奪い、城を破壊して(新旧伝、旧唐書巻一〇三王君㚟伝、新唐書巻一三三同伝)、玉門軍(甘粛省敦煌県の東二八〇里、即ち今の安西県)へ向つた。吐蕃はここで捕えた僧侶を涼州にやつて、君㚟が城を閉して戦わないのを揶揄したが、彼は父が捕えられたのを知り城壁より西望して涙を流し遂に出兵することを敢てなさなかつた(両唐書王君㚟伝)。マンポジェは別に常楽県(甘粛省酒泉県西二〇〇里、今の玉門県の東)を攻撃したが、県令の賈師

順は城を十数日固守して動かなかつた。そこで吐蕃は瓜州城を陥れたタグラコンロェの軍と合して城の総攻撃に取りかかつたが、旬余日を経て④これを陥すことができず遂に「降らなくてもよいから城中の財物を贈ればこちらは退却しよう。」と申し送つた。賈師順は士卒を裸体にさせてその衣類を贈り城中に財物がないように見せかけたので、はじめて吐蕃軍は退却した（旧唐書王君㚟伝）。彼等は更に安西都護府に向つて作戦したが副都護の趙頤貞が奮闘してこれを撃退したと言う（新伝）。さきに開元十五年に突騎施蘇禄が吐蕃と連合して安西を囲んだことを述べたが（本論文〔中〕七〇・七一頁）そのとき連合した吐蕃軍と言うのはこのタグラコンロェ指揮下の方面軍を指すのかも知れぬ。

タグラコンロェは瓜州城を占領せず掠奪のみで引揚げたが、これは吐蕃本国では非常な功績と見なされたらしい。吐蕃年代記には兎の年（七二七）の条に（DTH. p. 24）、

カチュシンチャン Kwa chu sin caṅ のシナの城塞は占領せられたり……〔冬に〕バーのタグラコンロェ Dbaḥs Stag sgra lhoṅ lod は大論に任命せられたり。

とあり、彼はその年のうちに大論 Blom chen（＝宰相）に任命されている。カルチュン碑文、第二詔勅などにはチデツクツェンがラグマル地方にカチュル Kwa chur の寺院を建てたことを言うが、トゥッチ氏 Giuseppe Tucci はこの寺院建立を瓜州占領の記念のためと見なしている。⑤吐蕃の軍事行動は瓜州城の攻陥や常楽県での交渉に見るごとく掠奪が目的であり、瓜州城における成功はその意味で確に吐蕃にとつて利益を齎らしたのであろう。唐が瓜州城の回復に建康軍使左金吾将軍の張守珪を刺史とし、州城を修築し人民を招集して生業に復帰させた（旧伝）のは、その事実を側面から物語るものでなければならぬ。

ところでこの際河西節度使は王君㚟より兵部尚書蕭嵩に代えられたが、これは王君㚟の戦死と言う思いがけない事件が勃発したからである。ことは吐蕃にも関するので一応ここに述べておこう。突厥が六八〇年代に漠北に帰還し再びその勢力が強大となり、カパガンカガン Qapagan qagan（＝黙啜、六九一―七一六在位）の時代になつてその征服が東西に進んだことは既に知られた事実である。その活動の影響をうけて回紇、契苾、思結、渾などの四部は圧迫を避けてゴビを渡り甘州、涼州の間の地帯に転住して来た。王君㚟はまだ官位の低いときに四部に往来し軽く扱われたことがあり、これを怨んで河西節度使となると些細のことから四部の人々を捕縛した。四部では困惑し、使を長安に送つて実情を訴えようとしたが、王君㚟は先廻りして、四部が制し難く又彼等が反乱計画を立てていると上奏した。玄宗は中使をやつて査察させたが、四部はこれに会つて実情

を訴えることができないままで終つた（両唐書王君㚟伝）。結局瀚海大都督の回紇承宗は瀘州（広西省上思県南）、渾大徳は吉州（同省吉安県）、賀蘭都督契苾承明は藤州（同省藤県東北）、廬山都督思結帰国は瓊州（広西省瓊山県東南三十里）に流され、回紇伏帝難が新に瀚海大都督に任命された（新唐書王君㚟伝、通鑑開元十五年九月の条）。回紇承宗の族子で瀚海司馬の護諭はこの処置を怨み何時か父の仇を報いようと王君㚟を狙つていたが、その機会が案外早く到来した。吐蕃が間道づたいに突厥へ使を送り、それを邀撃するために王君㚟が自ら精騎を率て肅州に出動したからである。突厥と吐蕃の連絡の結果は必ずしも史上に現れていないが、当時の突厥は復興間もない北方ステップの一大強国であり、前に引いた吐蕃の書信にも弁明していたごとく（本論文〔中〕六七頁）開元六―七年以前にも既に両国の連絡は明かに存在していた。王君㚟は帰還の途中甘州西南の鞏筆駅⑯に至つたが、このとき護諭の伏兵が起つてこれを攻撃し、君㚟は左右数十人と朝方より暮に至るまで奮闘した。しかし左右はことごとく死し、護諭は君㚟を殺しその屍を以て吐蕃方面に逃走した。涼州駐屯の軍は追撃したが護諭は屍を棄てて逃れ去り、遂にこれを捕えることはできなかつた（両唐書王君㚟伝）。王君㚟は郭知運と同じく瓜州の出身であり、勇名は西北異民族の間に轟いていた（本論文〔中〕六五頁）。従つて異民族の実情にも深い理解をもつていたに相違ない。それだけに微官のときに異民族から受けた侮蔑は相当彼の心を傷けたのであろう。しかしそれにしてもなお河西節度使の重任を帯びる身となつて復讐的行動をとつたのは些か軽率の誹を免れまい。彼が玄宗に用いられたとき、張説は源乾曜に「王は勇敢だが思慮が足りない」ことを言つたが、そのとき張説は両国の関係を和平より戦争へ方向を傾けることを恐れてこの言を述べたのであつた。しかしこの言は王君㚟が回紇らに対して取つた処置、又彼の運命的な最後についてみると、よく合致する鋭い人物批評と言わなければならぬ。

王君㚟の戦死した翌年開元十六年には吐蕃においても名将タグラコンロェの死があつた。タグラコンロェは瓜州城の攻掠ののち頗る威名が振い、大論に任命せられて吐蕃の軍政両面に権力を握つたが、河西節度使の蕭嵩は人を送つて彼が中国と通じていることを吐蕃に流言させた。ツェンポはこの反間工作に乗つて彼を誅殺したが、年代記には龍の年（七二八）のこととして（DTH. p. 24）、

冬にツェンポはラグマルの宮殿にあり。バーのタグラコンロェは批難せられ、ロのチュンサンオルマン Ḥ.bro Chuṅ bzaṅ ḥor maṅ 大論に任ぜられたり。

とあり、編年記宰相表にも（DTH. p. 102）、

そののちバーのタグラコンロェ大論となれり。批難せられてロのチュンサンオルマン Ḥ.bro Cuṅ bzaṅ ḥor maṅ〔大論と〕なれり。

とある。通鑑にはこの事件の時期を十五年の閏九月の条にかけているが、チベット文書の十六年冬の項に記されているのに従いたい。通鑑はこの項の末尾に「吐蕃由是少衰」と述べているが、これはその後の事情の推移を一言で巧に表現したものである。

一〇

開元十六年秋七月には吐蕃の大将悉末朗が再度瓜州に来寇したが、都督の張守珪[7]はこれを撃退した。ついで隴右節度使張忠亮、河西節度使蕭嵩は吐蕃を青海の西南の渇波谷に破つた（旧伝）。そこへ積石、莫門両軍の兵馬が全勢力を集結して合流したので追撃戦にうつり、敵の大莫門城を攻陥した。捕虜千余人、馬一千四、犛牛五百頭、武器、軍需品の多数が鹵獲され、又このとき敵の駱駝橋（新伝、橐它橋）が焼きはらわれた。大莫門城、駱駝橋の位置については拠るべき史料を見出し難いが、胡氏は吐蕃が河西九曲を得たとき洪済、大莫門などの城を以てこれを守つたと言い（本論文〔中〕五七頁）、又大莫門城は九曲にありとも言う（通鑑開元十六年秋七月乙巳の条）。顧氏は読史方輿紀要巻六四西寧鎮大莫門城の項に、

在鎮西二百余里、近故楡谷中……

駱駝橋在大漠門西、浜河。

と言つているから、黄河と柴集河との合流点と煖泉河口との間にそれらの存在することを認めたのであろう。

同年八月には蕭嵩は再び副将の杜賓客に弩手四千人を率いさせ、吐蕃と祁連城下[8]に戦わせた。八時頃より日没まで戦闘を繰返し（旧伝）敵の副将一人（通鑑、冊府元亀巻九八六征討五、開元十五年八月の条大将一人）を斬り、五千の首級を挙げたので（新伝、冊府元亀同上）、敵は山中に逃れ去り声をあげて敗戦を泣き悲しんだ。玄宗は侍臣に「この度の作戦は自らが立案指導するから敵は必ず敗北するであろう」と言つたが、この予言は確に適中したのである（旧伝）。

翌開元十七年になると唐の攻撃は最高調に達した。三月には張守珪と沙州刺史の賈師順が吐蕃の大同軍を討つて、大にこれを破つた（新伝、冊府元亀巻九八六征討五、開元十七年二月の条）。勿論大同軍は河東節度使管轄下のそれでなく、顧氏が読史方輿紀要巻六四沙州衛大同城の項に、

在沙州西南、唐景雲中吐蕃所置……又墨離軍。

と述べる大同城である。新唐書地理志瓜州の条には、

西北千里有墨離軍。

とあり、杜佑の通典巻一七二州郡二には北庭節度使の管轄下に、

墨離軍、晋昌郡（＝瓜州）西北千里。

とあり、元和郡県図志巻四〇涼州墨離軍の条にも、

瓜州西北一千里。

とある。

大同軍の攻撃に続いて朔方大総管（通鑑、朔方節度使）信安王禕は、吐蕃の石堡城を抜き首四百余を挙げ、二百余人を捕虜にした。新唐書地理志鄯州鄯城の項には、

儀鳳三年置、有土蝶山、有河源軍、西六十里有臨蕃城、又西六十里有白水軍綏戎城、又西南六十里有定戎城、又南隔澗七里、有天威軍、故石堡城、開元十七年置、初曰振武軍。

とあり、石堡城は楊氏の唐地理志図に記された綏戎城、定戎城よりするとその位置は青海山脈の西端、湟水に向つて北流する小河の西側に求め得る。当時唐の防禦施設は青海山脈の南北に配置されており、吐蕃が柴集河、黄河の線より青海山脈の北麓に出ようとすると、当然青海沿いにこの石堡城の線を突破しなければならない。通鑑開元十七年春二月のこの攻撃を記した条の胡注には、

宋白曰、石堡城在龍支県西、四面懸崖数千仞、石路盤屈、長三四里、西至赤嶺三十里。

とあるが、龍支県は新唐書地理志鄯州の条に県名として挙げられ、

肅宗上元二年、州没吐蕃、以龍支、鄯城隷河州。

とあるから、恐らく上元二年に石堡城も吐蕃に没したのであろう。唐会要巻七八諸使中、節度使の条に、振武軍⑨のことを記して、

振武軍、置在鄯州鄯城県西界。吐蕃鉄仞城、亦名石堡城。

とも言い、新伝下にも、長慶二年劉元鼎が吐蕃に使したときの道程について、

過石堡城、崖壁峭豎、道回屈、虜曰鉄刃?城。

と述べているが、これはチベット史料には明かに Mkhar lcags rtse（鉄鋒城）と記されているものである。即ち吐蕃年代記の蛇の年（七四一）の条に（DTH. p. 26）、

ソシャルチョヱ Bzo shal chos は戦い、チャグツェの城 Mkhar lcags rtse を再び取れり。

とあるが、これは旧伝開元二十九年（七四一）の十二月の条に、

吐蕃又襲石堡城、節度使蓋嘉運不能守、玄宗憤之。

とあるのに完全に一致する。

吐蕃は石堡城を陥れてからこれを拠点とし河西方面への活動を継続した。そこで玄宗は信安王禕に、この機会に河西隴右の軍を発して石堡城を奪取することを厳命したのである。諸将は、この城が険阻な地にあり、かつ遠方に存在するので時期を考慮することを主張したが、禕は兵を率いて急速に攻撃し、これを奪回した。玄宗は非常に喜んでこの城に振武軍の名を付与したのである（旧唐書巻七六、新唐書巻八〇、信安王禕伝）。石堡城が再び唐側の手に帰したことは戦局に深い影響を及ぼすことになつた。吐蕃は蠟骨を使とし、書を国境で渡して和平を打診させたが、それには、

「ツェンポは論莽熱 Blon maṅ lsher、論泣熱 Blon khri lsher (?) などの将軍に、〔鄯州〕都督、刺史に謝罪することを命じたから、都督は腹心の吏を遣わして曩骨と会盟のことを議してもらいたい。」

とあつた（新伝）。これが開元十八年の五月であるが、更に秋九月にも吐蕃の使者がやはり和平を願つてきている[10]（通鑑）。玄宗はかねがね吐蕃の書信の無礼さに感情を害していたので媾和などは許せないことを言つたが、忠王友の皇甫惟明は吐蕃と和親することが有利なことを熱心に説いた（旧伝）。

開元の初期にはツェンポは幼年でありましたから、どうしてそのようなこと（対等の書信を書くこと）が〔自ら〕できましよう。きつとこれは辺境にいる軍の将軍がその時限りの功績を作りあげようとしてこの手紙を偽作し、陛下を激怒させたのであります。両国は既に戦を交え、軍隊を動員していますが、〔彼等は〕利欲を追い求めて、機会次第で公然と盗賊を働き、功績表を偽作しては勲爵を授けられることを求めています。その損害は幾万にもなり、国家にこれが何の利益がありましよう。今河西、隴右の人民たちは疲れはててい[illegible]ますが、その原因は皆これらのことによつているのです。もし陛下が使をやつて金城公主に謁見させ、これによつてツェンポと直接媾和することを約束し、ツェンポが頭を下げて臣と称するようにされれば、長く辺境を安静にすることができます。これが長期間にわたつて人民を安隠にする方法であります。

開元の初期にツェンポは幼年であつたと言うのは、前に論証したごとく、チデックツェンが七一二年（先天元年）に九歳で即位式を挙げた事実と一致する。辺境の将たちの恣意的な行動とはボンダギェルツェンスン、タグラコンロェなどの活動のことを言つているのであろう。ただ注意すべきは金城公主に連絡をとつて和平を交渉しようとする一事である。玄宗は惟明の言に従つて、彼と内侍の張元方を使者として吐蕃に行かせ、二人はツェンポと公主に会い詳しく玄宗の意向を伝えたが（旧伝）、このとき公主には別に天子の親書を呈した（新伝）。ツェンポは喜んで和平を願い、貞観以来の勅書を皆出して見せた程であつたが、そのときの上表には次のごとき句がある（旧伝）。

去年の冬、公主は使者の婁衆失若を遣わし、書信をもつて特に行かせましたところ、今使者を下され公主の安否を尋ねられて外甥は喜びに堪えません。

これによつて見ると、開元十八年の二度の吐蕃の遣使のうちに公主の両国和平の希望を伝えたものがあり、それによつて惟明の「金城公主によつて」の和平コースが推進されたことが思われるのである。

惟明らが帰国するとき吐蕃は論名悉猻[11] Blon miṅ sleb と副使の押衙将軍浪些紇夜悉猻 Laṅ sa khri rgyal sleb (?) をともに入朝させたが、この使節団は同十八年の十月に長安に到着した。論名悉猻は

かつて金城公主を迎えに来朝したこともあり、中国の文章に頗る練達しており、その才能と弁舌で朝廷の人々を驚かしたことがある（旧伝）。十九年春正月に唐は御史大夫であつた崔琳を返礼使として吐蕃に行かせたが（旧伝、通鑑）、このとき吐蕃の使者は金城公主に毛詩、礼記、左伝、文選各一部を賜わらんことを願つた（旧伝）。朝廷では于休烈、裴光庭などの反対はあつたが（旧伝、新唐書巻一〇四于休烈伝）玄宗は秘書省に命じてこれを写させて送つた（旧伝）。

この年の秋九月には論尚它磚[12]が使者として来（通鑑）、赤嶺で馬を交換し甘松嶺で互市をすることを希望した。宰相の裴光庭の意向により、甘松嶺は許されず、赤嶺でこれらのことを行うことが決定された。（新伝）。なお二十一年（七三三）の二月に金城公主は本年九月一日に赤嶺に碑を立て唐蕃の分界を定めることを願つて来たが、それはこのとき工部尚書の李嵩が多くの賜物をもつて吐蕃を訪問し、その帰還の時期が秋の終りに当つていたからである（唐会要巻九七吐蕃、開元二十一年の条、冊府元亀巻九七九外臣部和親二）。年代記鳥の年（七三三）の条には（DTH. p. 49）、

シナの使者リシャンショ Li shan so はその随員とともにツェンBisam（ツェンポの意であろう）の国で〔ツェンポに〕敬意を表したり。

とあるが、リシャンショは「李尚書」で李嵩を指していることは疑いない。このとき吐蕃は辺境の官吏が国境を犯すのを戒めるために、敕令を下してよくこのことを周知せしめることを提案し、唐でもこれに賛同して勅を下して張守珪、将軍李行緯、吐蕃の使者莽布支 Man po rje などに劍南、河西、磧西の州県を廻つて相互に侵犯することのないように指示した[13]（新伝、冊府元亀九七九和親二）。旧伝では「唐は開元二十二年に将軍の李佺を遣わして現地で境界を決して石碑を立てた」とあるが今はとらぬ[14]。

第二回の戦争状態はここに終つたが、敵方より降嫁した金城公主にとつては、両国の和平状態の招来はもともと心からの願であつたに相違ない。玄宗に親書を送つて和平交渉のルートをつけ、更に赤嶺に碑を立てることを提案するなど、金城公主はこの度も両国の関係改善のための相当の貢献をなした。翻つてこの第二回の戦闘を概観すると河西地方において、吐蕃は唐にかなりの打撃を与えたが、結局石堡城を奪取され、結果としては得るところは多くなかつた。殊に西方ギルギットのトルキスタン・ルートが遮断されたことは何としても吐蕃にとつては堪えがたい苦痛であつたであろう。ギルギット・バスの再開を狙つて吐蕃は虎視眈々とし、かくして第三回の戦闘が再び勃律問題から幕を切つて落されるのである。

一一

開元二十四年（七三六）の正月は、吐蕃は使者を遣わして方物や金銀の器物数百個を献上し、形や作り方が皆変つていたので、玄宗は提象門外に陳列して群臣たちに展示し（旧伝）、如何にも正月らしいのどかな風景を描いた。これだけを見れば両国の関係は平和そのもので、そこに何等の緊迫した空気は感じられないであろう。ところがこの年のうちに吐蕃は勃律を攻撃し、勃律は狼狽して使者を唐朝に派遣して急を告げた。新旧伝ともこの勃律が大小いずれであるかは明示しないが、当然これは小勃律＝ギルギット方面でなければならぬ。玄宗は使者を出して戦闘を止めさせようとしたが、吐蕃は聴かず遂に勃律国を撃破した。玄宗はこれを聞いて甚だ怒つたが（新旧伝、通鑑二十五年二月己亥の条）今は手遅れで如何ともすることができなかつた。年代記には牛の年（七三七）のこととして（DTH. p 50）、

ロンギェサンドン Blon skyes bzaṅ ldoṅ はルシャ国 Bru sha に派遣されたり……ルシャの王は戦に勝ちて敬意を表し来れり。

とあるが、この場合のルシャは大勃律国で、吐蕃とともに小勃律を攻撃してこれに勝ち、ツェンポに慶賀の意を表しに来たのであろう。

一方河西方面を見るとその頃唐と吐蕃とは柵を作つて境界とし守捉使[15]を置いて各々の領域を守備していた。河西節度使の崔希逸は吐蕃の将軍乞力徐[16] Khri gzu に守捉の徹廃を熱心に説き、乞力徐は希逸を信頼して約を結んで軍事施設を取りはらつた。ところが希逸の傭史（新旧伝。通鑑には傭人）の孫誨が入朝し、自らの功績をたてるために吐蕃の無防備を衝くべきことを玄宗に上言した。而して「帝は之を採り」（新伝）、内給事の趙惠琮と孫誨に実情を調査させた。惠琮も功を立てることを考え、詔を矯めて希逸に下し、希逸は涼州の南より入つて吐蕃の軍を青海の西に撃破した（通鑑）。唐軍は吐蕃の二千人の首級を得、敵将の乞力徐は身を以て逃れたが、唐朝では惠琮、誨らに皆厚く賞を与えた（旧伝、通鑑）。この事件は新旧伝、通鑑ともに勃律問題と関係あることは一言も記していないが、勃律が吐蕃に征服されたときは「玄宗は甚だこれを怒つた」し、孫誨の計画については「帝はこれを採り」、戦闘終了後惠琮、誨らが厚く賞せられているのを見ると、玄宗が勃律問題から吐蕃を攻撃する必要を考え、青海方面の戦闘を容認したことは今や否定することはできない。

さて吐蕃はこの攻撃を怒つて唐との和親を断ち、二十六年の三月には報復的に河西に入寇した。唐軍の崔希逸はこれを破つたが、一方鄯州都督知隴右留後の杜希望は吐蕃の新城を陥した（冊府元亀巻九八六征討五、開元二十六年三月の条、通鑑）。旧伝では「その城を威武軍として兵一千をここに鎮守させた」とあるが、新伝には威戎

軍とあり、胡氏は考異の説を引いてやはり威戎軍に従つている。威戎軍は通典巻一七二隴右節度使の条及び元和郡県図志巻三九鄯州の条によれば、西平郡（＝鄯州）の西北三百五十里にあると言うから、恐らく赤嶺青海間に置かれた城塞であろう。崔希逸はこの年の五月に河南の尹に転じたが、吐蕃の信を裏切つたことを悔み間もなく死亡した。河西節度使の職は一時李林甫が兼ね、六月には岐州刺史の蕭炅がこれに補せられた（通鑑）。又杜希望は隴右節度使となり、太僕卿の王昱[15]が劒南節度使とされた。恐らく玄宗は三方面の人材を入れかえ、軍備を強化して吐蕃に積極的に当らせることを考慮したのであろう。同時に赤嶺の碑を砕いたのはその決意の並々ならぬものを思わせられるのである。

鄯州方面では杜希望は七月に吐蕃の架けた黄河の橋を奪取し、河の左岸に塩泉城を築いた。吐蕃は三万の軍を出してこれを防いだが、唐軍は左威衛郎将王忠嗣が部下を率いて突入し数百人の吐蕃兵を殺した。これに乗じて希望の軍は攻撃を加え大勝を博し（通鑑）、塩泉城に鎮西軍を移動させた。鎮西軍は新唐書地理志河州の条に、

西百八十里有鎮西軍、開元二十六年置。

とあり、大体保安河口の付近に比定される。水経注巻二河水に引かれた段国の沙州記には吐谷渾の架橋について、

吐谷渾于河上作橋、謂之河厲、長百五十歩、両岸纍石作基陛、節節相次、大木従横、更鎮圧両辺、俱平、相去三丈、並大材、以板横次之、施絢綢甚厳飾、橋在清水川東也。

と述べているが、清水川を現在の清水河とすれば、保安河の河口近くでこれに合する支流であり、その橋は保安河の河口の東側におくことができるであろう。恐らくは吐蕃の河橋はこの吐谷渾の架橋の再建されたものであり、その勢力が保安河の流域まで発展し鄯州方面を脅かすために、この橋は作られていたのであろうと思われる。

翌二十七年には吐蕃は白草、安人などの軍に入寇したが、臨洮、朔方の軍が出動してその危機を救つた。白草軍、安人軍については胡氏は、

白草軍在蔚如水之西、又鄯州星宿州[川?]之西、有安人軍、蔚如水在原州蕭関県、此時吐蕃兵不能至、疑白草軍当作白水軍。

と注するが、白草軍は原州蕭関県（現在の固原県の北）の近辺にあるとすれば、当時の吐蕃の力では到底ここまで到達する筈はない。安人軍は、元和郡県図志巻三九鄯州の条によれば、河源軍の西一百二十里の星宿川にあり、河源軍は鄯州の西一百二十里にある。従つて白草軍も当然この近傍に求めるのが隠当で、白水軍の誤と見るのが正しいであろう。とすれば白水軍は前掲書の鄯州の条に、

州西北二百三十里。

とある白水軍そのものを指している。旧伝にはこの事件について、

白水軍の守捉使の高東于は数旬にわたつて防守したが、急に賊は退却した。蕭昊は副将をやつてその背後を攻撃し、これを撃破した。

とあつて白水軍守捉使の活動を報じているのはその傍証となると思う。

さて青海方面での活動が阻止せられたため、吐蕃は鋒を転じて劒南の方面に漸次その主力をそそぐようになつた。開元二十六年に劒南節度使の王昱は安戎城を攻撃した。安戎城は四川茂県の西南にあると言われるが（通鑑胡注）、その位置は適確には比定できない。もともと吐蕃の西南夷に通ずる道を塞ぐために儀鳳二年に唐の築いた城であり、永隆二年には吐蕃のために陥れられた。このため雲南方面の諸蛮が皆吐蕃に降り、松州、茂州、嶲州は絶えず危機にさらされていた。[18] 王昱はこれを奪回するために、安戎城の左右に二つの新城を築き、軍を蓬婆嶺の麓に駐屯させて劒南道の物資食糧を運んでこれを守備した。その年の九月に吐蕃は精鋭をつくして安戎城の救援に向い、唐軍は大敗して両城は陥れられた。王昱は助かつたが将兵数万人は戦死し（新旧伝）、武器食糧などは皆敵に鹵獲された。王昱が失敗したのち華州刺史の張宥が益州長史劒南防禦使となり、主客員外部の章仇兼瓊が益州司馬防禦副使となつた。張宥は文官であり、もともと軍事的な経略の才などは持たなかつたから、兼瓊は結局その任務を一手に掌握するようになつた（旧伝）。間もなく兼瓊は入朝して安戎城攻略の方策を盛に天子に述べたが、玄宗は喜んで張宥を光禄卿に遷し、兼瓊を益州長史に昇任せしめてこの方面の軍を統率支配せしめることにした。

開元二十八年三月に兼瓊は安戎城内の吐蕃の翟都局と維州別駕の董承晏[19]に連絡し、急に城内に唐軍を引入れて吐蕃の軍を屠殺し、ついで監察御史の許遠に兵を率いてこの城に鎮守させた（旧伝、冊府元亀巻九九二備禦五、開元二十八年三月の条）。玄宗はこの成功を非常に喜んだが、旧伝二十七年の条の末尾に、

なおこのため（安戎城攻略のため）〔天子は〕親ら城を奪取する計画を立てた。

とあり、この作戦の成功したときの中書令李林甫の上表には、

陛下は軍隊を動員せず、近頃中使の李思敬に羌族を諭させたところ、彼等は〔朝廷の〕恩を思わないものはなく、心から考えを改めて自らともに〔城を〕陥れることを謀りました。

とある（旧伝、冊府元亀前掲の条）。翟都局、董承晏二人とも羌族なのか、或はいずれかが羌族なのか、或は他に羌族があつて彼等を誘導したのかは明かでないがそれはいずれであつてもよい。李林甫の上表にはまた、

〔陛下の〕神のような計謀を普通には思い及ばない点までめぐらし、優れた計略を将来まで見通されて、長い間誅罰を逃れていた

者を一朝にしてことごとく滅されました。

とあるのを見ると、前述の引用文と併せて玄宗自身がこの攻略に甚だ積極的であったことが知られる。

十月には吐蕃は安戎城の奪回を試み、[20] 維州（四川省故威州の北三十里）方面にも入寇した。章仇兼瓊は副将をやってこれを防禦させ、又関中の隴騎を救援に出動させた。時期が厳冬にかかったので吐蕃は自ら退却し、唐側の防禦作戦は成功を収めたが、唐ではこのとき安戎城の名を平戎城と改めた。

第三回の戦闘は開元二十九年より再び大規模に展開され天宝七載まで継続するのであるが、その前半戦は劍南方面の成功を加え、唐蕃の抗争は完全に中国側にイニシャティブが握られたことを示す。折しも金城公主の訃報が二十八年十二月に唐廷へ到着し、吐蕃はこれと同時に和平を求めたが、玄宗は遂に許可を与えなかった（旧伝[21]、通鑑）。

一二

金城公主の逝去について、年代記には兎の年（七三九）のこととして（DTH. p. 26）、

金城公主 Kim çeṅ khoṅ co 逝けり。

とあり、蛇の年（七四一）の条には（DTH. p. 26）、

皇子レボン Btsan po sras Lhas bon と皇后公主 Btsan mo khoṅ co の二人〔の屍〕は陵墓に運ばれたり。

とあつて、公主の埋葬が行われたことを示している。旧伝、通鑑の記事は一見公主の死が開元二十八年（七四〇）にあつたごとく記しているが、これはその使者が唐廷に到着した年次にかけられているだけである。新伝には、

是歳金城公主薨。

とあるが、「是歳」は吐蕃が白水、安人軍に入寇した年であるから明かに二十七年（七三九）で年代記の年次に一致する。テプテルゴンボ Deb gter shoṅ po (ka 26 b) には、

キムシンコンジョ Kim çiṅ koṅ jo はチベットに三十年住し、五十一歳にて辛巳の年 Leags sprul に逝きたまえり。

と公主の逝去の年を述べるが、別稿にて論述したごとく、[22] テプゴンの中の年代は中国史料の系統を引いているので、公主の歿年は旧唐書などの開元二十九年に一致し信頼することができない。「チベットに三十年住した」とあるから、開元二十九年より逆算すると先天元年（七一二）公主は入蔵したことになるが、この年では先に決定した景龍四年（七一〇）の入蔵と言う事実と矛盾する。尤もテプゴンは睿宗即位の後にかけて (ka 26 b)、

チベット王は〔シナの〕王女を納れ、壬子の年 chu pho byi ba にキムシンコンジョ Kiṅ çiṅ koṅ jo はチベットに送られたり。

とあり、入蔵を先天元年のこととしているからテプゴン内での矛盾はない。しかしこれについてはやはりより基本的な吐蕃年代記の記載によるべきであつて、それで計算すると公主は景龍四年（七一〇）より開元二十七年（七三九）まで在蔵したことになり、三十年の在蔵と言うことは真実となる。テプゴンの記載は入蔵、逝去の年次は誤つているが在蔵年数、享年については事実を伝えていることが感得される。もしこの記載が正しいとすれば五十一歳にて逝去したと言うのはテプゴンのみの伝えるところで貴重な史料と言わなければならない。逆算すると公主は二十二歳で入蔵したのであり、この年で七歳のツェンポに仕えた公主の心労が思いやられる。二十二歳での婚姻は適齢を過ぎているように見えるが、貞観中に于志寧が衡山公主の長孫氏への降嫁について、礼を引いて（新唐書巻一〇四于志寧伝）、「女十五而笄、二十而嫁、有故二十三而嫁。」と述べているのを見れば、金城公主の場合も晩婚と称すべき程のものでもない。ましてや公主は武后の喪に服したことを考慮に入れるならばそれは尚更のことである。しかし五十一歳でその生涯を終えたとすれば、当時の中国人としてはそれは決して天寿を全うしたとは考えられない。

思うに公主湯沐の邑とされた黄河上流の河西九曲の地は公主在蔵中の三回の戦闘にすべて根拠地として利用され、唐軍も第三回の戦闘にのみ拠点を一個その地帯に設置し得るに止まつた。理由はともあれ、自分の化粧料が軍事拠点となつて母国に損害を与えることは、公主としては何としても心の痛む事実であつたに相違ない。第一、二回の戦闘の後の和平交渉に自ら書信を玄宗に致し解決の緒を作つたのは、公主としてはなすべき当然のことと考えられ、喜びの心以てこれに当つたことと思う。この間における公主の心情を臆測すべき材料は正史類にはないが、ただ冊府元亀巻九七九外臣部和親第二に次のごとき記事がある。

〔開元十二年〕八月に謝飈国王の特勒は使者の羅火拔を来朝せしめた。火拔は奏して言つた。

「謝飈国はカシミール国から一千五百里あり、そのカシミール国は吐蕃の金城公主の居所から七日路程の所にあります。公主は去年五月、漢使二人を遣わして間道伝いにカシミール国に行かせ、カシミール王に伝言されました。

『汝は誠心を以て漢のために尽そうとしている。妾は逃げ出して汝の所に身を投じようと思うが、汝は妾を受け入れるかどうか。』

カシミール王はその言葉を聞いて非常に喜んで言いました。

『公主さえ来て下されば心を尽して御もてなし致しましよう。』

時にカシミール王は又使を遣わして私のところの国王に言いました。

『天子の女が逃げて我が国に身を投ぜられることを願つてい

られるが、〔そうすると〕必ず吐蕃の兵馬がこれを追つて来ることが考えられる。我が方の力では〔これに〕対抗することはできないから〔貴国の方から〕兵を我が方へ派遣されんことを御願いする。そうすることによつて吐蕃が破られ、公主が到着されることを希望する。』

私の国の王はこれを聞いて非常に喜び、使をカシミール王に遣わして承諾致しました。そして私を入朝させ、陛下に直接御目にかかり処置について御伺いして来いとのことです」。

帝は〔これを聞いて〕全くその通りでよいとし、帛百疋を賜わつて本国に帰らせた。

謝魁国が現在ガズニを中心とするザブリスタンであることは、藤田博士の考定以来定説となつている。[20] 公主が逃走の使者を遣わした開元十一年は第二回戦闘が勃律方面で開始された直後であり、ギルギット地方は唐の勢力下にあり、慧超伝によればそれは開元十五年までは確実であつたから、[21] 公主の居城即ちラサ方面からカシミールに逃れるのは半同、大勃律のルートを巧に通過すれば不可能のことではない。しかし公主の逃走などと言うことが現実問題として可能であるかどうかは頗る疑問としなければならない。それにもかかわらず公主がその意を伝えたとすると、彼女は両国の抗争に挟まれて吐蕃国内で相当困難な立場にあつたのではあるまいか。その結果として精神的に悩みを重ねてノイローゼ的状態になり、非現実的なこのような計画をカシミール王に齎したのではなかろうか。

第二回の戦闘は最後に和平が招来され、公主自身もそれについては間に立つて種々斡旋の労をとつた。しかし第三回の戦闘では遂にこれが終了しないうちに彼女自身の長くない生命の炎は消え去つた。如何にも公主は吐蕃に降嫁してからその生涯の間に政治的接衝の面にしばしばその姿を現わした。しかし吐蕃では「婦人は政に及ばざる」ものであつたとすれば、彼女が両国間の難問題の解決を積極的に推進したなどとは夢にも考えることはできない。唐も吐蕃も金城公主のこのような存在を、ただ局面の展開を自己に有利にするために適当に利用したに過ぎないのである。このような事実は彼女の降嫁が全く政略的な結婚以外の何物でもなかつたことを如実に示しているものであろう。

古来和蕃公主の悲劇は王昭君にはじまり、唐の時代にも甚だ多くの実例が記録の上に残されている。金城公主もその例外にはなり得ない。前述のごとく開元五年玄宗への上書には、彼女は、「奴奴降蕃事緣和好」と言つて自らの運命を自覚した言葉を残している（本論文〔中〕六六頁）。王族とは言え衰頽した家に生れ、政略結婚のため、はじめて政治的統一を経験した国家に降嫁せしめられ、しかもその国は母国とは絶えず敵対関係にあつた。その心労のみにても長からざる生涯は定められた運命であつたのであろう。吐蕃の使者が公主の訃を伝えたときは隴右、劍南ともに唐の勢力が吐蕃の兵力を圧倒

していたときではあつたが、両者の感情の冷却は如何ともすることができなかつた。吐蕃の使者が来て数個月後にはじめて玄宗は公主のために哀悼の式を光順門外に挙げ、朝廷の政務を三日間停止した。

和蕃公主でも天宝四載三月に契丹の松漠都督李懐節に嫁した静楽公主や、饒楽都督李延寵に嫁した宜芳公主は、その年の九月には契丹、奚の叛乱とともにその生命を奪われた（旧唐書玄宗本紀天宝四載の条、新唐書巻二一九契丹伝、奚伝）。このような例から見れば金城公主の場合は、なお幸福であると見るべきかも知れない。しかし冒頭にも述べた通り、同じく吐蕃に降嫁しながら文成公主とは余りにも異つた道を歩んだ金城公主の運命には何人も一掬の同情の涙をそそがずにはいられないであろう。

〔完〕

註

① 旧唐書巻一〇三王君㚟伝のみは開元十六年冬のこととするが誤である。

② 旧伝には大非山とあるが、今新伝に従う。旧唐巻一〇三王君㚟伝によれば王君㚟、張景順が奇襲したときにはタグラは既に大非山を渡つていたと言う。大非山が大非川の誤でないとしてもその山は大非川の近傍にあつたと思われる。

③ 拙稿「古代西蔵の内部構造」古代学第一巻二号八〇頁註③④参照。ただしこの文ではバーのタグラコンロェを巫者の系統としたが、バー dbaḥs は吐蕃の氏族の名であるから訂正しておきたい。

④ 新伝には「嬰城固守凡八十余日」とあるが、今通鑑に従う。旧唐書巻一〇三王君㚟伝には、タグラが瓜州攻陥ののち常楽県に来つてこれを攻撃したが「数日不陥」で、奇計を用い更に又「攻城八日」したとある。

⑤ G. Tucci, The Tombs of Tibetan Kings, Rome, 1950, p. 62 なおカチュの寺院については拙稿「吐蕃仏教の史料について」東洋史研究第十三巻五号、六〇頁参照。

⑥ 新唐書地理志甘州張掖県の条には「西有𤞷笮駅」とする。旧唐書王君㚟伝には「甘州南𤞷笮駅」とある。

⑦ 張守珪は瓜州刺史として吐蕃に掠奪破壊された瓜州城の復興に当つたが（本文六五頁参照）、その間吐蕃の再度の来襲にも詭計を以てこれを退け、所期の目的を達成した。従つて朝廷は彼の功を嘉して瓜州を都督府となし彼を都督に昇進させた（通鑑開元十五年閏九月の条）。

⑧ 通鑑胡注によれば甘粛省張掖県の祁連山にあると言う。楊守敬の唐地理志図には張掖県の西を流れる沙河の西岸のあたりに「祁連戍」を置いているから、現在の中寨堡から順徳堡、鎮羌堡あたりのいずれかの地点にこれを比定し得るであろう。

⑨ 旧唐書地理志、通鑑巻二五一、元和郡県図志巻三九隴右道部州などには「振威軍」の名が見えているが、これは小畑氏の研究に従い「振武軍」の誤と見なしたい（小畑龍雄「唐代隴右振武軍考」羽田博士頌寿記念東洋史論叢四六二頁）。

⑩ 新唐書玄宗本紀には十月戊子の条に「吐蕃請和」とある。

⑪ 旧伝は論名悉猟とあるが「論」は「論」の誤であろう。今通

鑑に従う。

⑫ 冊府元亀巻九七一外臣部朝貢第四には論尚他碑が十九年八月に来朝したことを言う。論尚他碑は Blon shaṅ stag bsher(又は lha bsher) かと思われるが「論尚」はいずれか一字が不要であろう。

⑬ 年代記に猿の年（七三二）のこととして（DTH. p. 24）

ツェンの国（＝ツェンポの国）にシナの使者リケン Li khen ……は敬意を表せり。

とあるがリケンは李行緯を指している。冊府元亀巻九七九外臣部和親第二、開元二十一年七月の条には、吐蕃が宰相論紇野贊 Blon khri rgyal btsan（？）を来朝せしめて和好を通じたときの金城公主の表を掲げているが（全唐文巻一〇〇では「請置府表」）それには、

妹奴奴言、李行緯至、奉皇帝兄正月勅書。

とあり、開元二十一年正月に李行緯が吐蕃王廷に使したことを明かにしている。バコー、トゥサン両氏は右の年代記の文に二十二年の将軍李佺の遣使のことを註しているが、年代が一致しないし、又李佺 jji tsi^{w}an の音は Li khen のそれとは似て非なるものである。khen は前述のごとく敬称の卿 k'iwng と考えるべきであろう（本論文〔中〕七一頁註①）。

⑭ これについては唐会要巻九七吐蕃、開元二十一年の条に、

及樹之日、詔張守珪、李行緯、与其使莽布支同訖其事。

とあるが、二十一年九月には碑を立てたのではなく、それについて国境判定など種々の打合せを行い、翌年李佺を建立式に派遣したのであろう。なお唐会要は右の文に続いて、

是月、遣其大臣屬盧論莽藏来朝、及献方物。

とあるが、李昂の遣使による莫大な賜与に対して直に謝礼の使者を出したのであろう。屬盧論莽藏 t'ś'^{w}ok luo luon mâng dzâng は Cog ro blon maṅ bzaṅ と還元できる。彼は冊府元亀巻九七一外臣部朝貢第四によると開元二十五年十二月にも来朝している。

⑮ 唐初の軍制では辺境の軍隊は大は軍と言い、小は守捉と言った。守捉使は守捉の統率者である。

⑯ 恐らく開元二年ボンダギェルとともに臨洮方面に入寇した論乞力徐と同一人であろう（本論文〔中〕六四頁）。ただし前号でこれを khri gzigs と還元したのは khri gzu に改めたい。

⑰ 旧伝には王昊とあるが今胡氏の考えに従う。

⑱ 開元二十八年に安戎城の奪回が成り、中書令の李林甫がこれを賀したときの上表には（旧伝）、

伏して思うに、吐蕃のこの城は丁度要衝に当っており、地勢の険によって自ら固く守り、それによって辺境を窺っております。今まで永年蟻のようにここに集って〔我が方を〕悩ましており、たとい百万の軍があっても効果を挙げるのは困難でありました……

とある。成功を祝うため、困難を強調する点は多少あるとしても、誇張して述べられている傾向は殆どない文章であろう。

⑲ 旧伝は董承宴であるが、今は冊府元亀巻九九二外臣部備第五、開元二十八年三月の条及び通鑑に従う。

⑳ 冊府元亀前掲の条には「雍州」とあるが誤りであろう。
㉑ 旧伝は公主の訃報の到着を二十九年春にかけている。
㉒ 拙稿「西蔵文献の史料的価値」（下）東洋史研究第十一巻二号六〇頁。
㉓ 藤田豊八「慧超往五天竺国伝箋釈」第二北京版、民国二十年、五二丁表。
㉔ 前掲書三三丁裏。又本論文〔中〕六九頁参照。

〔略語表〕

新伝＝新唐書巻二一六上、吐蕃伝上
旧伝＝旧唐書巻一九六上、吐蕃伝上
DTH＝J. Bacot, F. W. Thomas & Ch. Toussaint, Documents de Touen-Houang relatifs à l'histoire du Tibet, Paris, 1940–46.

〔追　記〕

金城公主と吐蕃のツェンポとの間に子があつたかどうかは中国の記録では全く不明である。ただプトンには次代のツェンポ、チソンデツェンが公主の子として生れたことを言つているが、吐蕃年代記の記載によれば、この事実は全く認めることができない。

又広徳元年（七六三）に吐蕃は長安に侵入したが、そのとき傀儡政権を建て公主の兄弟広武王承宏を天子の位に即かせた。公主の入蔵によつて吐蕃人が公主の一家に親近感を抱いていたことはけだし当然と言うべきであろう。

右の二つの事実については近く発表する「吐蕃の長安侵入について」（京都大学文学部五十周年記念論集）のうちに詳細に述べておいたから、ここではこれ以上は触れないことにする。

新入会員

戸田　芳実
戸塚　雅夫
中戸　義賢
中村　哲
永原　慶二
蓮岡　法暲
林　幹弥
東森　市良
藤岡　大拙
細川　亀市
堀口　康夫
松本　久子
森　正夫
山香　茂
山口　義広
横山　裕男

投稿についてのお願い

「史林」が定ページ、定期刊行が略々順調に進んでいることは、会員各位の御熱心な御支援の賜と、感謝致して居ります。最近御投稿原稿に雄篇力作が多く特に長論文が山積してページ制約より分割掲載が多くなって居りますので、今後の御投稿については左の規定をお守り下さいますようお願い申上げます。

記

枚数　四〇〇字詰原稿用紙五〇枚以内。
原稿〆切　各奇数月の毎十日。